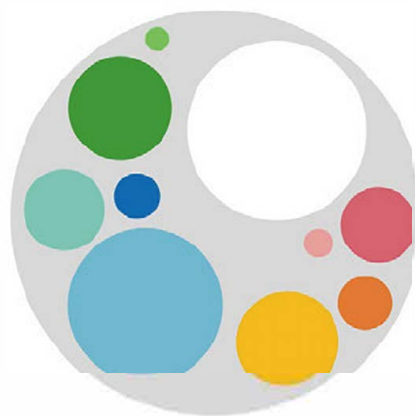


日本心理療法統合学会 第2回学術大会
「多様な学派からの学び」

プログラム・抄録集

会期

2022年3月20日（日）・21日（月・祝）



JSPI

Japanese Society for Psychotherapy Integration

大会長挨拶

日本心理療法統合学会 第2回学術大会 大会長

東 齊彰



このたび、日本心理療法統合学会第2回学術大会を開催する運びとなりました。2019年に設立された日本心理療法統合学会は、2021年3月にオンラインでの第1回学術大会を開催し、盛況のうちに大会を終えることができました。今回も、未だ終息を見ないコロナ禍の事情を鑑みて、オンラインでの開催となりました。

本学会の特徴は、様々な心理療法学派の対立を乗り越え、互いを尊重しながら、よりよい心理支援に向けて探索を続けていく姿勢を持っていることです。今大会のテーマは「多様な学派からの学び」としました。精神分析療法、認知行動療法、パーソン・センタード・アプローチ、家族療法などの学派のスピーカーから見解を聞き、そこからよりよい心理療法のあり方を考える機会にすべく、大会企画シンポジウムやワークショップを設定しています。

オンライン大会の強みは、会場に足を運ぶことなく、自宅や職場から気軽に参加できることです。心理療法を統合し、幅広い見解を模索する本学会にはふさわしい形態であるともいえます。北海道から沖縄まで、また海外からも多くの参加者がオンラインでつながり、多様な考えを共有できることを願っています。

大会プログラム タイムテーブル

1日目(3/20)

9:00	トライアルセッション (Zoom接続テスト)	
10:00	開会の辞	
10:10	大会長講演	60min.
11:10	総会(会員限定)	50min.
12:00	昼休憩	60min.
13:00	大会シンポジウム	150min.
15:30	休憩	10min.
15:40	公開SV(会員限定)	
17:40	休憩	10min.
17:50 -20:00	懇親会	

- ・大会長講演「日本で心理療法を行うこと ― 統合・折衷の思想・文化論的考察」
- ・総会：活動報告を行います。会員限定です。奮ってご参集ください。
- ・大会シンポジウム：「各学派から見た統合的心理療法」
- ・公開スーパーヴィジョン：会員限定です。秘密保持義務を厳守のもと、ご参加いただけますようお願い致します。
- ・懇親会：参加者が集い、親交を深めることを目的に実施致します。Zoomを用いた懇親会ということで皆様のご協力も必須です。いろいろなお話に花が咲かせられるよう、学会役員一同お待ち申し上げます。

2日目 (3/21)

9:30	トライアルセッション		
	2アカウント並行運用		
10:00	ワークショップ1 (岡野先生)	ワークショップ2 (諸富先生)	90min.
11:30	休憩		
11:40	ランチ交流会		60min.
12:40	2アカウント並行運用 自主シンポジウム1 自主シンポジウム2		90min.
14:10	休憩		
14:20	研究発表(2アカウント並行運用)		90min.
	3題(30分×3=90分)	2題(30分×2=60分)	
15:50	休憩		20min.
16:10	2アカウント並行運用		90min.
	ワークショップ3 (三田村先生)	ワークショップ4 (杉原先生)	
17:40	閉会の辞		

・ 同時間帯の並行開催プログラム

ワークショップ1と2、及び3と4、自主シンポジウム1と2、研究発表1～3と4～5はそれぞれ同時間帯に並行開催のプログラムとなります。2つのうち一方をお選び頂き、それぞれに割り振られているZoomURLからご入室ください。

・ ランチ交流会：懇親会に続き、昼食を摂りながら参加者のみなさんで集います。

・ 自主シンポジウム：第2回学術大会からの初の試みです。会員の皆様で企画頂きましたシンポジウムを行い議論を深めて参ります。

・ 研究発表：会員から各種研究の成果をご発表いただきます。

「日本で心理療法を行うこと ― 統合・折衷の思想・文化論的考察」

第2回学術大会会長 東齊彰

現代的な心理療法が創始されて 100 年あまり、日本にはそれから数十年遅れて心理療法が導入された。精神分析療法、行動療法、クライエント中心療法の 3 大潮流を初めとして様々な学派の方法が開発され現在に至り、本学会ではそれらの統合・折衷を目指している。

では、欧米社会由来の心理療法を、ここ日本において適用するにはどのような問題があるだろうか。演者は様々な心理療法の訓練を受け実践してきた中で、同じ学派の方法を用いてもそれを使うセラピストの個人的資質、準拠する集団の特徴、そして地域や国、民族特有の考え方、つまり思想的傾向によって用いられ方が異なるのではないかという問題意識を持つようになった。

本講演では、各学派の心理療法が持つ人間理解の仕方（認識論）をまとめ、次いで国別や地域別の文化の持つ特徴を論述した上で、日本において欧米由来の心理療法をどのように取り入れ、変容させてきたかを、心理学、心の哲学、比較認識論、比較思想論などの学際的観点から論じたい。また、各学派の心理療法を統合的、折衷的に用いることの意味について、歴史的、時代的な認識論の変遷の観点から考察し、統合・折衷的心理療法の現代的意義について論じてみたい。

各学派から見た統合的心理療法

シンポジスト 宮田智基（帝塚山学院大学大学院）

シンポジスト 末武康弘（法政大学）

シンポジスト 有光興記（関西学院大学）

シンポジスト 野末武義（明治学院大学心理学部・IPI 統合的心理療法研究所）

指定討論者 杉原保史（京都大学）

司会 前田泰宏（奈良大学名誉教授）

<企画趣旨>

統合的心理療法もしくは心理療法への統合的アプローチは、クライアントの役に立ち、効果を高めるために、さまざまな心理療法の理論や方法に内包された人間の機能に関する多くの見解を考慮に入れながら、柔軟にアプローチすることに特徴がある。それらの見解の主たる出自やリソースは、心理療法の4大学派として知られる、精神分析、認知行動療法、ヒューマニスティックアプローチ、家族療法/システム論に見出すことができる。

そこで本シンポジウムでは、上記の各学派における研究や実践において高名な4名の先生方から、統合的・折衷的实践の基礎となる各学派の基本的な考え方（人間観や変化のメカニズム/プロセスなど）や各学派における「統合」に対する姿勢や動向について話題提供をしていただく。そして、それらを受けて、統合的心理療法に関する幅広い見識と経験をお持ちの杉原保史先生に指定討論をお願いし、議論を深めていく予定である。

本シンポジウムを通して、さまざまな観点から人間を理解することの意義や、効果的な実践を行うために、事例の実情に応じて、どのような見解を、どのように選択し、どのように組み合わせるのか、その理論的な基盤や判断基準、またアセスメントや治療関係の留意点についての有益な示唆が得られるだろう。

大会当日は、登壇者と参加者の皆さまとの間の活発でオープンな議論も期待している。皆さま、どうぞ奮ってご参加ください。

各学派から見た統合的心理療法（精神分析の立場から）

－対人関係精神分析から統合的心理療法への寄与－

宮田智基（帝塚山学院大学大学院）

対人関係精神分析は、H.S.サリヴァン、E.フロム、C.トンプソン、フリーダ・フロム・ライヒマンらによって創始された精神分析の一学派である。対人関係精神分析では、転移と逆転移が入り混じった形で、クライアントの過去の対人関係のパターンが、セラピストとの間で「再演」される事態に注目してきた。内的対象関係だけでなく、外的対人関係を重視することから、「精神分析的ではない」と言われることも少なくない学派である。

対人関係精神分析は、認知療法や家族療法とも親和性が高いと言える。認知療法のアーロン・ベック、短期療法のグレゴリー・ベイトソン、家族療法のサルバドール・ミニューチンは、サリヴァンの影響を受けていたことが知られている。また、統合的心理療法のポール・ワクテルは、対人関係精神分析の出身であり、対人関係精神分析と行動療法、家族療法とを統合した「循環的心理力動アプローチ」を提唱している。

対人関係精神分析の立ち位置は、精神分析諸学派と心理療法諸学派との「中間」に位置するような学派だと言えるだろう。学会当日は、サリヴァンのパーソナリティ理論を概観し、対人関係精神分析から統合的心理療法への寄与について考えてみたい。

各学派から見た統合的心理療法

（パーソンセンタードアプローチの立場から）

末武 康弘（法政大学）

ロジャーズによるパーソンセンタードセラピー（PCT）は、心理療法の関係要因としての中核三条件（一致、受容、共感）を抽出したという点で共通要因アプローチの先駆と見なすことができる。また、ジェンドリンのフォーカシング指向セラピー（FOT）はフォーカシングというコンセプトや方法を軸とした理論統合アプローチであり、グリーンバーグのエモーション・フォーカスト・セラピー（EFT）はPCTに種々のヒューマニスティック・セラピーの方法を取り入れようとする同化的統合アプローチあるいは技法折衷アプローチとすることができるだろう。

このように、パーソンセンタードアプローチ（PCA）はもともと心理療法の統合を指向する

方向性をもっていた。しかし現在、統合的心理療法にPCAをどのように生かしていけばよいか、ということについての議論はまだ十分ではない。

パーソンセンタードセラピー (PCT)、パーソンセンタード・フォーカシング指向セラピー (PCFOT)、パーソンセンタード・体験的セラピー (PCET)、パーソンセンタード・ヒューマニスティック・セラピー (PCHT)、多元的アプローチといった多様な枠組みから、PCAの今後の統合的なあり方について考えてみたい。

各学派から見た統合的心理療法（認知行動療法の立場から）

有光 興記（関西学院大学）

認知行動療法(CBT)は、科学的証拠に支えられているが、診断ベースで単一の症状しか扱わず、回数限定のマニュアルを使用するので、個々のクライアントには適合しないという批判を受けることがある。しかし、近年は診断横断的プロトコルや技法統合的なプログラムが次々に開発されており、エビデンスに基づきつつ個々のクライアントにセラピーを適合させる上では第1選択肢であり続けている。その意味で統合的心理療法家は、共通要因を重視するだけで技術革新から離れたり、技術的折衷主義に傾倒するでもなく、有効性が科学的に証明されている複数のCBTプロトコルを実施できるように学び続ける必要がある。本発表では、CBTの近年の動向をレビューし、CBT同士での統合とそれによる理論的發展、CBTに組み込まれる他の心理療法とそのエビデンスについて紹介し、治療同盟の仕方やクライアントの好みへの対応可能性についても論じ、統合的心理療法としてのCBTを概観してみたい。

カップル・家族療法の立場から ～個人療法との接点を探る～

野末 武義（明治学院大学心理学部・IPI 統合的心理療法研究所）

1950年代に登場したシステム理論を基盤とする家族療法には、家族一人ひとりの心理的側面を重視するものから家族メンバー間の相互作用のみを扱うものまで様々なアプローチがあり、1970年代後半から個人療法との統合についても論じられてきた。また、カップル・セラピーは、対象関係論、EFT、CBTなど、個人療法の理論を基盤としたものも少なくない。

この話題提供では、家族療法やカップルセラピーの概要を整理した上で、基本的な治療構造としてのカップル・家族合同面接を取り上げ、個人面接と対比させながら、そのメリットと難しさについて取り上げたい。また、セラピストに求められる基本的な治療的態度としての多方向への肩入れと戦略的中立性、カップル・家族に対する受容と共感を左右するセラピストの自己理解の重要性についても言及し、個人療法との接点を探りたい。

会員限定セッション

3/20 時間 15:40～17:40

公開スーパーヴィジョン

演者：小林里華

スーパーヴァイザー：

竹内 健児 （立命館大学大学院）

加藤 敬 （こども心身医療研究所）

吉岡 千波 （公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院）

司会：福島 哲夫（大妻女子大学教授/成城カウンセリングオフィス所長）

[企画趣旨]

本学会の設立趣旨の一つに、「心理的支援者の初期教育・生涯教育」がある。心理的支援の実践家が、その専門性を維持し高める努力を怠らないでいることは、生涯止まることなく続く、実践家の大切な倫理の一つである。本プログラムは、そのような趣旨に則り、「公開スーパーヴィジョン」という形式で、心理的支援者の教育や研修の場を提供することを目的に企画された。

昨年の第一回大会に引き続き、今回も心理療法統合の観点を共有しつつも立場・年齢・性別の異なる3名の実践家をヴァイザーとして、事例提供者の事例について多様な立場から建設的なスーパーヴィジョンを提供する。

このSVを通じて、事例理解が深まり、それを各自が実践の中でどのように活用すべきかのヒントが得られるのみならず、統合的心理療法の視点、態度、技法について、さらに、統合的SVとはどのようなものであるべきかについての示唆が得られるだろう。

* 会員限定の企画のため、会員の皆様のみメールでご案内した URL にてご入室ください。

「これからの心理専門職教育」

- 企画・司会 山蔦圭輔（神奈川大学人間科学部・合同会社メンタルヘルスケア・ネットワーク）
話題提供者 三好真（大妻女子大学人間関係学部）
話題提供者 廣瀬雄一（大妻女子大学人間関係学部）
話題提供者 福田恵里香（由比ガ浜こころのクリニック・成城カウンセリングオフィス）
話題提供者 木村詠美（ウパウパハウス訪問看護ステーション）
指定討論者 福島哲夫（大妻女子大学人間関係学部・成城カウンセリングオフィス）
指定討論者 野末武義（明治学院大学心理学部・IPI 統合的心理療法研究所）

〔企画趣旨〕

公認心理師資格が法制化して以降、心理専門職としての能力を十分に担保することが求められている。これは、公認心理師のみならず臨床心理士をはじめとした心理的支援を担う専門家にも同時に求められる課題といえる。これまで、心理専門職（主として臨床心理士）教育では、演習や実習科目の履修、ケースカンファレンスの機会やスーパーヴィジョンの機会により、専門職としての素地を形成し、大学院修了後では、継続した教育や各種研修会、スーパーヴィジョンの機会などを活用し、心理専門職としての能力向上が図られてきた。一方で、心理専門職自身が研鑽することもさることながら、大学院修了後のいわゆる「卒後教育」を拡充するなど、今後、心理専門職を養成する課程においても十分な工夫を行う必要がある。

本シンポジウムでは、1) 国外における心理専門職教育の実際と課題、2) 公認心理師養成課程における工夫（主に実習について）、3) 実践家として後進を育成するための苦悩と学び、4) 実務家から心理専門職を目指す学生の実際について話題提供し、今後の心理専門職教育について議論することを目的とする。

国外における心理専門職教育の実際と課題

話題提供者 三好真（大妻女子大学人間関係学部）

アメリカでの心理専門教育においては、誰もが安心して受けれる心理支援の場となる公益性と、その一翼を担う専門家としての自覚（Professional Identity）の教育が非常に重要となる。この心理支援における公益性においては、属性などに対する偏見や差別行為の禁止のみならず、排他的にならない多様性に対する理解と共生（Inclusiveness）の概念の醸成が重要である。

この共生の姿勢には、支援者は、要支援者や関係者に対して信仰や価値観・自由意志の尊重といった倫理的な姿勢が求められる一方で、心理専門職の教育の在り方においても、学生・訓練生に対する支援哲学・オリエンテーションの多様性と統合性に対する尊重が求められる。そして、どちらかがその価値観を持ち合わせていない場合には、丁寧で現実的な対応が必要となる。そこで、本発表においては、実際にアメリカで起こった心理専門職教育における個人の信仰の自由と差別についての判例や発表者自身が所属していた教育機関の制度を紹介しつつ、統合的アプローチと共生・多様性のつながりがもたらす発展と課題について、議論を深めていきたい。

公認心理師養成課程における工夫

話題提供者 廣瀬雄一（大妻女子大学人間関係学部）

大学教員として心理専門職を目指す学生を指導するようになって、改めて気づいたことがいくつかある。ひとつは、心理療法に様々な学派、多種多様な理論や技法があるということ。学生たちは思った以上にまだよく知らないということである。そのイメージはまだかなり狭く限定されている。授業で様々なタイプの心理療法の存在を知ってもらう時、多くの学生は新鮮な驚きを示す。それは心理専門職養成において求められる課題への気づきももたらしてくれる。

もうひとつは、心理臨床実践のかたちの多様性について、私たちはまだ十分に伝えきれていないのではないかとということである。とりわけ、典型的な個人心理療法以外の仕事の存在と

その大切さについて知ってもらうことは重要ではないだろうか。例えば大学院生の精神科実習において、入院病棟やデイケアに実習生がひとりで「放り出される」体験はひとつの定番であるが、指導を誤れば、そこでの「居る」型の仕事が「初心者向け」と誤解され軽視されてしまいかねないようにも思われる。

当日はこのような素朴かつ雑多な気づきを挙げつつ、諸先生方にご経験談やご助言をいただき、心理専門職教育について検討を深めてみたい。

実践家として後進を育成するための苦悩と学び

話題提供者 福田恵里香（由比ガ浜こころのクリニック・成城カウンセリングオフィス）

演者は臨床経験 16 年の中堅心理士として、幼児から成人を対象とした精神科クリニックと、統合的な心理療法を行うカウンセリングオフィスに勤務している。どちらの職場でも、後輩心理士（院生～数年の実践経験）のスーパーヴァイザーとしての役割を担うことが多くなった。SV を行う中で、それぞれのヴァイザーが大学院教育の中で得てきた知識・技術の違いはもとより、育ってきた文化・風土の違いを感じることも少なくない。時にはやりにくさを感じることもあるが、統合的な視点はそれぞれのバイザーの個性や適性、臨床実践する場の構造に合わせて、効果的に SV を行う上で役立つ。対象がクライアントでもヴァイザーでも、困り感に寄り添い、安心感の中で新たな気づきを得られるように関わる姿勢は同じである。

オフィスでは教育分析的にヴァイザー自身の個人的課題も含めてじっくり取り扱うこともできるが、クリニックでは自身の業務の合間を縫っての SV であるため、深いやり取りに発展しにくい。臨床現場での指導の実際と、ヴァイザーとしての悩みや、そこから得られる学びややりがいについて振り返るとともに、実践場面における効果的な訓練のあり方について検討したい。

実務家から心理専門職を目指す学生の実際

木村詠美（ウパウパハウス訪問看護ステーション）

助産師として周産期医療に従事する中、周産期におけるメンタルヘルスケアの実践が急務となっている。妊産褥婦にとって、もっとも身近でメンタルヘルス支援をしている専門職は助

産師である。こうした中、産科医療の高度化やハイリスク妊婦の増加などにより、助産師の心身に対する負荷は増大し、その結果として、助産師がバーンアウトに陥る可能性やメンタルヘルス不調に陥る可能性が危惧される。

以上から、話題提供者は、助産師としての就業経験を踏まえ、心理専門職として助産師に対する心理的支援を行っていくことを将来的な目標としている。医療従事者から心理専門職を目指すにあたり、これまで受けてきた専門職教育を振り返ると、看護師や助産師の教育は大学における教育（演習や臨地実習など実践的な教育を含む）だけではなく、卒後教育についても体系的に整備されている。また、助産師の能力を育成する方法のひとつとして助産師実践能力習熟段階（クリニカルラダー）が整備されており、実践能力の習熟に有用な経験や達成すべき課題が明確に示されている。今後、心理専門職としての能力を培うための教育を受けるにあたり、他の医療にかかわる資格と同様に、クリニカルラダーのような明確な達成課題が示されることが、学びやすさや能力の醸成につながると考えられる。

自然回帰とリソースの観点から見た統合的心理療法

司会・企画者 浅井伸彦（一般社団法人国際心理支援協会，MEDI 心理カウンセリング）

話題提供者 伊藤之彦（一般社団法人国際心理支援協会，MEDI 心理カウンセリング）

話題提供者 三瓶真理子（EASE Mental Management）

話題提供者 浅井伸彦（一般社団法人国際心理支援協会，MEDI 心理カウンセリング）

指定討論者 東 斉彰（甲子園大学・羽衣カウンセリングオフィス）

[企画趣旨]

企画者は、家族療法から発展したセラピーや、トラウマセラピーを中心とし、国内外で複数のセラピーについて学んできた。現在も引き続き学びながら臨床を行っているが、その中で気づいた点がいくつかある。一つは、昨今注目されるいくつかのセラピーが人間、ひいては動物、自然に元来存在する力への信頼からきているということがある。

人間を含む動物には、生存のためにアラートとして「恐れ」や「怒り」「悲しみ」などが強く設定されている。だが、現代社会において、逆にそれらが「生きづらさ」につながり、それが精神衛生上の困り事となっている。その昔、天才催眠療法家と呼ばれたミルトン・エリクソンは、患者が持つリソースを有効活用して(utilization)、回復へと導いた。また、Seikkula (2015) が、治癒のための要素 (Healing elements) としての「愛」について述べた。「愛」やその他リソースの賦活は、人間の心身の回復や成長につながるといえよう。

以上のように、本自主シンポジウムでは、自己治癒力の賦活という観点からの「回復」と、その自然の中で必要とされてきたアラートを鎮め、人間として幸せを賦活させるためのリソース開発に重きを置いた形での心理療法の統合について検討したい。

話題提供者 伊藤之彦（一般社団法人国際心理支援協会、MEDI 心理カウンセリング）

演者は認知行動療法、マインドフルネス、EMDRを中心に、また日本発祥の森田療法や内観療法の知見も活かしながら臨床を行っている。森田療法では、自然という語は、人間から自立して存在している対象世界の自然を意味するのではなく、「おのずからそうなっているさま」、「天然のままで人為の加わらないさま」と事物の様態を示す語として捉えている。また、森田療法の核心をなす概念は、「あるがまま」であるが、宿命論的意味合いではなく、「目的本位・行動本位」を強調した上で、人間の自然態としての生き方を説いている。一方、内観療法は、内観3項目を通じて、自分自身という視点を徹底させ、自我の発達を安全な場の中で内的資源の再構築が行われる。これらは、日本古来の心理療法として全体性が強調されている。

認知行動療法をはじめ、日本で普及している心理療法の多くは、西洋文化の影響を受け、心理的側面を人間から切り離し、治療対象としているものが多い。そのような心理療法は、他動詞的に「クライアントを治す療法」となりやすい。しかし、今回、自然回帰とリソース開発の観点から、自動詞的に「クライアントが自ら回復する療法」を統合的に考えていきたい。

話題提供者 三瓶真理子（EASE Mental Management）

演者は学生時代に来談者中心療法を学び、臨床に出てからは主に産業領域にて認知行動療法、ソリューション・フォーカスト・アプローチを中心に活用し、最近ではAEDP（加速化体験力動療法）、Somatic Experiencing®を活用しながら臨床をおこなっている。

企画者が述べる「昨今注目されているセラピーでは自然に元来存在する力への信頼」が背景にある、というのは同意する点である。AEDPで言う感情を感じること、Somatic Experiencing®でおこなう自己防衛反応を完了させること、これらは人間に備わった自然な反応を完了させるという点で共通している。本来備わった力を適切に遂行することが、癒しや心身のバランスの回復につながるということになる。

我々心理援助職はクライアントのリソースを賦活し、その遂行をサポートしながら、また我々自身のこともリソースとして積極的に活用する。人間が社会的動物ならばそれもまた自然なことであり、心理援助職の面白さでもある。リソースとしての心理援助職の存在についても触れていきたい。

話題提供者 浅井伸彦（一般社団法人国際心理支援協会，MEDI 心理カウンセリング）

演者はオープンダイアログの国際トレーナーであり，またトラウマケアの方法として，身体志向のトラウマセラピーである Somatic experiencing®や EMDR，またその補助としてマインドフルネスなどを用いて臨床を行っている。臨床を学び，実践を続ける中で，元々人間・動物に与えられた力へ敬意を示すことの重要性を感じている。それに加え，家族療法や解決志向アプローチ，トラウマセラピーでのリソース開発という視点に注目したい。

その昔，天才催眠療法家と呼ばれたミルトン・エリクソン（以下，エリクソン）は，患者が持つリソースを有効活用して(utilization)，回復へと導いた。エリクソンはカール・ロジャーズのことを，「彼は私と似ている」と言っていたそうである。彼らの行っている臨床の元は同じであり，いずれもクライアント（患者）主体のプローチであったのではないか。それは，単にクライアント（患者）に寄り添うというだけでなく，元来の人間らしさ，動物らしさに回帰することにつながるのではと思いを馳せる。人間の頭による操作は，結局「自然」ではなく「操作」になる。操作することの弊害から逃れ，自然の力を存分に発揮することを目指した統合の形を考えたい。

研究発表 I

3/21 時間 14:20-15:50

座長：山蔦圭輔（神奈川大学）

I -1:

時間 14:20-14:50

「心理療法におけるポジティブ感情の相互的感情調節についての質的研究」

渡邊 小百合（大妻女子大学人間文化研究科）

福島 哲夫（大妻女子大学 人間関係学部）

I -2:

時間 14:50-15:20

「心理面接におけるクライアントの選好に関する検討—日本語版 Cooper-Norcross Inventory of Preferences (C-NIP) の開発—」

鈴木 孝 (京都文教大学 臨床心理学部 助教)

栗山 七重 (大阪大学大学院 人間科学研究科 博士後期課程)

佐々木 淳 (大阪大学大学院 人間科学研究科 准教授)

I -3:

時間 15:20-15:50

「適切な観察主体を育む統合的アプローチ

ホロニカル・アプローチによる心理社会的支援のポイント」

千賀 則史 (同朋大学)

定森 恭司 (心理相談室“こころ”)

研究発表 II

研究発表 II

時間 14:20-15:20

座長：巢黒慎太郎（神戸女子大学）

II-1:

時間 14:20-14:50

「ACT とモードワークを中心とした統合的アプローチにより、心理的柔軟性の向上や自己理解の進展が見られた強い不安を持つ女性の事例」

佐藤 亜美（こまち臨床心理オフィス）

II-2:

時間 14:50-15:20

「合気道を取り入れた心理療法の事例発表」

田多井 正彦（しらかば心理相談室）

ワークショップ

本ワークショップは臨床心理士の資格更新ポイント申請予定です。
計6時間（4つすべてのワークショップ）を受講された方は、研修会参加という名目で資格更新ポイントに計上頂くことができます。

受講者名簿を当会事務局より資格認定協会に提出しますため、各自、臨床心理士の資格更新の際の書類に、本年の当会主催ワークショップ4題をご受講なさった旨を書いてくだされば、受講証明書を協会に提出頂くことは不要です。

したがって、証明書発行の予定はございません。（なお大会参加はポイント対象になっておりません。ご了承お願い申し上げます。）

ワークショップ1

3/21 時間10:00～11:30

関係精神分析への誘い

岡野憲一郎（京都大学教育学研究科）

現代においては様々な治療法が提唱され、それを学び実践する私たちは今や何を選び、どのようなプロトコールに従ったらいかに悩む時代になってきている。この発表では関係精神分析の立場が現代的な治療法の全体的な流れを包括する立場にあることを示し、この学派の流れに改めて触れることの意義を伝えたい。その上で精神分析の伝統に従い無意識の問題を引き続き重視し取り扱うという事の意義についても触れたい。

人間性心理学、特にロジャーズをベースに据えた統合的アプローチ

諸富祥彦（明治大学文学部）

私は、人間性心理学、なかでもロジャーズのパーソンセンタード・アプローチやジェンドリンのフォーカシング指向心理療法、フランクルのロゴセラピー、ミンデルのプロセスワークなどに多くを学びながらみずからの実践をおこなってきたものである。しかし同時に、精神力動論、認知行動論、システム論の各アプローチにも多くを学んでいる。

この講座では、主にロジャーズのアプローチを改めて学びながら、ロジャーズをベースにしつつ各アプローチをどのように統合しながら日々の実践をおこなっているか、一つのモデルを示したい。その際、新著『カウンセリングの理論（上）（下）』誠信書房にもとづいて、各アプローチの違いを鮮明にしつつ、それらを自分自身の中でどのような文脈で、どのように統合しながら各アプローチをおこなっているかを示したい。また、ロジャーズのアプローチを基盤にして新たに提唱した統合的アプローチ、EAMA（体験—アウェアネス—意味生成アプローチ）の基本的な考えと実際についても新著『自己探究カウンセリング入門』（誠信書房）にもとづいて簡単に紹介したい

アクセプタンス&コミットメント・セラピー(ACT)

もしくは単に「行動療法」

三田村仰（立命館大学総合心理学部/ 個人開業）

アクセプタンス&コミットメント・セラピー（Acceptance and Commitment Therapy: ACT 〈“アクト”と読む〉とは行動分析学に由来する統合的な心理療法である。ACTにはさまざまな呼び名があり、「第3世代の行動療法」「文脈的認知行動療法」「臨床行動分析」、ごく最近では「プロセスに基づくセラピー」などとも称される。一方、ごくシンプルに言えば、ACTとは「行動療法」であるといえるが、ここで言う「行動療法」とは特定の技法（例：エクスポージャー）の集合体などではない。ACTという行動療法では、人の行動を、その人が生きてきた文脈、現在、生活している文脈のなかで意味をもつものとして捉える。この機能的視点に基づき、ACTの実践は極めて柔軟になされる。ACTでの実践をシンプルに表現するならば、その人にとって価値ある生き方を送っていくことを目指し、その際、それへの障害となるような心理的なものがきを手放せるよう、新たな体験の場を提供する、といったものである。当日は、統合的な心理療法としてのACT/行動療法の魅力をコンパクトに紹介する。

心理療法統合の概論

杉原保史（京都大学 学生総合支援センター）

心理療法は多様な学派から成っている。心理療法統合は、心理支援を行う上で、目の前のクライアントにとって少しでも効果の高い支援を行うために、多様な学派の理論的視点や関わりの技術をリソースとして幅広く活用する立場である。ではなぜ、単一の学派に基づく実践ではなく、多様な学派のリソースを活用する必要があるのだろうか。心理療法統合はどのような背景から興ってきたのか？ どのような歴史があるのか？ 心理療法統合と一口に言っているが、そこにはどんな異なるアプローチがあるのか？ こうした問いに取り組みながら、本学会会員ならぜひ知っておきたい心理療法統合の基礎知識について解説する。